

接触場面会話における発話の重なり

長谷川紀子

名古屋大学大学院国際言語文化研究科大学院生

noriko_h81@yahoo.co.jp

1. はじめに

会話では、複数の参加者の発話が同時に起こる発話の重なりが多くみられる。重なりには、協調的に会話を進めるなど肯定的に捉えられるものもあるが、接触場面会話を観察してみると、そうとは言えないものも多い。本研究では、接触場面会話の学習者による発話の重なりを分類し、その原因を分析する。対象者は、相手の発話中に自分の発話を重ねるにはある程度の日本語能力が必要であることから、中級学習者・上級学習者とし、レベルによって原因に違いがあるのかも比較・考察したい。

2. 研究の目的

本研究では、非言語行動も分析の観点に含め、以下の2点を明らかにする。

発話の重なりの原因：接触場面で、なぜ発話の重なりが起きるのか。

中級学習者と上級学習者の発話の重なりの違い：レベルにより重なりの頻度、原因に違いがあるか。違いがある場合、それは何によるのか。

3. 先行研究

発話の重なりの研究には、母語場面における重なりを分類し機能を分析した藤井（1995）、生駒（1996）等がある。また、木暮（2002）は接触場面会話も扱っている。しかし、接触場面会話における発話の重なりの原因を分析したもの、非言語行動を扱ったものはほとんどない。

本研究では、発話内容の分類は、藤井（1995）を採用する。また、重なり開始位置については、相手ターンの末尾、相手ターン開始直後（実質的な内容の前）、相手ターン途中 TRPⁱⁱあり、相手ターン途中 TRP なしの4つに分類する。

【表1】発話の重なりの内容の分類（藤井1995）

トピック	一致	不一致
発話権		
先行話者の発話権維持	調和系（フィードバック・完結）	調整系（確認・関連質問）
先行話者の発話権移動	独立系（トピックの継続・戻し・展開）	

4. 研究の方法

4.1 発話の重なり定義と、本研究の分析対象

複数の会話参加者の発話が同時に現れることとする。ただし、実質的なターンの重なりがない場合でも、先行話者の発話が途中である場合には重なりとして扱う。

本研究では相づちを、「うん」、「はい」など形式の決まった短い発話とし、相づち以外の発話が重なった場合を分析の対象とする。

【例1】

NNS 6	そのバイクが	べん	べん	きよく	*運転の-	[
NS 6		うん				[免許

[凡例] : 上昇音調 * : 1秒程度のポーズ [: 重なり開始位置

4.2 分析の枠組み

Gumperz(1982)の cross-talk model を参考に、以下の手順を進める。

会話(30分の自由会話)の録音・録画: 上級NNS、中級NNSの接触場面、母語場面各5組、計15組。

フォローアップ・インタビュー: 後日、ビデオをもとに会話参加者全員に個別に実施。

資料の文字化: 会話開始5分後からの資料を文字化。非言語行動の文字化は分析対象箇所とその前後。

資料の分析: 発話内容、先行発話に対する重なり発話の開始位置、重なり発話者が発話権をもっていたかどうか、非言語行動(以上は録音・録画データよりs)、参加者の会話相手や会話に対する態度(フォローアップ・インタビューより)。

4.3 対象者

- ・接触場面会話: 中級・上級学習者各5名(来日3ヶ月以内、中国語母語、女性)

名古屋大学の女子学生10名

- ・母語場面会話: 名古屋大学の女子学生10名

5. 分析

- ・上級NNSの接触場面では、全体的に重なり回数が多い。

すばやくNSの発話に反応できる。

NSが自己発話コントロールの度合いを下げている。

- ・発話の重なり数はNNS5が最多(37回)、次いでNNS2(31回)。

- ・ペア3・5は同時開始が多い。

ターンの受け渡しに関する非言語シグナルのやりとりが成功していないのではないか。

【表2】発話の重なり全体数（上級NNS接触場面）

ペア	NNS	NS	同時開始
1	11	11	0
2	31	12	1
3	20	24	14
4	11	12	7
5	37	34	16
計	110	92	39

【表3】発話の重なり開始位置と発話内容

NNS	調和系				調整系				独立系				計	
	末尾	開始直後	TRP	TRPなし	末尾	開始直後	TRP	TRPなし	末尾	開始直後	TRP	TRPなし		
上級 NNS	1	4	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	2	11
	2	1	2	0	6	1	3	1	2	7	2	3	3	31
	3	0	0	2	1	0	1	3	3	2	1	2	5	20
	4	0	0	1	0	0	0	0	0	5	1	2	2	11
	5	1	2	1	2	2	0	4	2	9	3	4	7	37
	計	6	4	7	11	3	4	8	7	23	7	11	19	110
	28				22				60					
NS1~5	10	2	23	19	6	1	6	4	8	2	10	2	93	
計	54				17				22					

・NNSは半数以上（60/110例）が独立系。

NNSは、相手の発話が終了していないのに、誤って終了したと判断した。

NSは、NNSの発話の重なりを留意する機会が多かった。

・相手のターン開始直後での重なりが、NSと比較して若干多い。

NNSは、会話相手であるNSのターン開始のシグナルに気づけなかった。

6. まとめ

以上の分析結果をまとめると、以下の3点のようになる。

発話の重なり回数は個人によって差があるが、11回から37回あった。

